

The Journal of True Care

2015
冬号
Winter
【Vol.26】



「関わり方を考える」

- ・ 巻頭言 02
- ・ 特集 在宅ケア組織
「Buutzorg (ビュートゾルフ)」とは何か? 06
- ・ 特集 ～「活動」と「参加」へのアプローチ～... 08
- ・ 地域ボランティア資源の開発 16
- ・ 地域連携 農福教民プロジェクト
「ハッピーブルースカイ」を通して 18
- ・ コラム 19
- ・ 感動体験 心のバトン 21



株式会社創心會 機関誌
2015年冬号 Vol.26

The Journal of True Care

2015
冬号
Winter

【Vol.26】

» INDEX

P02-05	巻頭言 代表取締役 二神 雅一
P06-07	特集 在宅ケア組織「Buutzorg (ビュートゾルフ)」とは何か? 本物ケア推進部 佐藤 健志
P08-15	特集 ～「活動」と「参加」へのアプローチ～ 訪問看護リハビリステーションサテライト笠岡 作業療法士 亀谷 滯 訪問看護リハビリステーションサテライト岡山 理学療法士 時耕 敏夫 リハビリ倶楽部茶屋町 社会福祉士 登喜 望 訪問看護リハビリステーション 作業療法士 水口 勝貴
P16-17	地域ボランティア資源の開発 株式会社ハートスイッチ 井上美由紀
P18-19	地域連携 農福教民プロジェクト「ハッピーブルースカイ」を通して 児童発達支援ルーム心歩茶屋町 作業療法士 西江 勇太
P19-20	コラム 本物ケア推進部 佐藤 健志
P21-23	感動体験 心のバトン リハビリ倶楽部笠岡 青野 克也 元気デザイン倶楽部 明比 佑真
P24	ニュース 編集後記

巻頭言

リハケアタウン元年を振り返る

代表取締役 二神 雅一

出席者

二神社長	
田中取締役	
河崎執行役員	
訪問看護リハビリステーション	宇野百合子
居宅介護支援センター	坂本 健二
リハビリ倶楽部茶屋町	泉 伸也
グループホーム心から	植田 貴也
生活環境プランニング	原田 薫
百年煌倶楽部	山川 恭子
五感リハビリ倶楽部茶屋町	浦道さとみ
ボジリハショート	小林 正幸
児童発達支援ルーム心歩茶屋町	西江 勇太
ぽっ歩保育園	植田 有彩

社長 私はOT、PT、STの3協会が立ち上げた訪問リハビリテーション振興委員会で制度化班の班長を務めているのですが、昨年、正にこの部屋で行われた会合の場で、地域包括ケアステーションの成功モデルである、オランダのビュートゾルフの話が初めて出ました。

日本でも実証開発のプロジェクトが行われるとの話で盛り上がっていたところ、OT協会の事務局長からその実証開発プロジェクトに参加してほしいと直々に要請を受けたときは、大変光栄に思いました。そのとき、タイムリーにできたのが北館だったのです。国が考えるケアの在り方の基本は「基本在宅、時々施設」ですが、それを実現するための様々な取組みがリハケアタウンでは可能になります。

実証開発のプロジェクトですから、思い切りチャレンジしてください。28年5月頃に発表の機会が設けられる予定です。社会保障の財源を維持できる枠組みの中で作らないといけないので、実証開発には生産性、効率性が求められます。また、本場のビュートゾルフはICT環境が大変優れています。私たちも更なる研究が必要です。一方、サービスの質の評価は非常に難しく、プロジェクトの中で大きな課題の一つになっています。

当社では通所はリハ特化・機能訓練重視で、要介護3程度の方までが標準モデルでしたが、その意味では今回の報酬改定の影響は極めて大きなものがありました。

しかし、百年煌を作り、中重度ケアに早めに取り組

んだことで、将来展望が見えてきた部分もあります。今後全面展開するに当たっては、この環境をベースに学んでいただく必要があります。併せて、認知症、中重度者、医療依存度の高い方に対するケアの環境を整えるためには、それに向けた人財教育を計画的に行うことも必要です。

当社はデイを中心に展開してきましたが、国が地域包括ケアステーションの核として考えているのは看護小規模多機能です。今後はこれを念頭に、サービス展開を考えなければなりません。

将来への準備として必要なことは、まず軽度の方は、事業所が互助の関係をどれだけ地域に展開出来るかということです。しかし、これは地方の財源に依存する脆弱さがありますから、市民が納得できるような事業展開が求められます。また、33年の報酬改定では要介護1、2の方がサービスの対象から外れる可能性も、念頭に置いておく必要があります。

いずれにしても、私たち専門職は認知症と中重度者をメインに関わっていく必要があり、専門性を高めることが重要です。地域包括ケアシステムはまだ介護保険を中心にしていますが、今後は子どもから全世代に対して整えていくというのが基本的考え方になります。子どものケア、就労移行などは非常に伸びし甲斐のある分野です。

● 認知症のご利用者様への関わり

田中 北館の主要メンバーの皆さん、リハケアタウン元年を振り返って、いかがですか。

山川 老老介護や独居の方に、在宅での生活を続けていただくことを目標に頑張っています。ご家庭の事情で施設に入居される方もオープン以降3～4名いらっしゃいましたが、私たちがバックアップすることで在宅での生活を継続できている方もたくさんいらっしゃいます。ヘルパー、訪看、リハに加え、ショートができた意味は大きく、復帰が難しいと言われていた利用者で、退院時ショートにまず行っていただき、体力をつけた上で自宅に戻られたケースがあります。その際、環境整備でリハやデイのスタッフも関わったのですが、そのようなケースを何度か経験できたことは実績だと思います。

社長 国もこのような成功事例を早く作りたいたいのではないかと思えます。

山川 入院中に認知症の症状が出ることによって、施設への申し込みをされる家族もいらっしゃいますが、私たちはなるべく在宅での生活を継続できるよう対応しています。

職員が気付いてケアマネジャーに報告したり、定期的にデイに来たり、ヘルパーの方が入るときに一緒に作業をするなど細やかな協力体制を取ること、症状が落ち着いたり、予防につながっている側面はあるように思います。

社長 認知症の方がこれから増えていくと言われる中で、在宅生活を継続できるか否かは、BPSDに対するアプローチや症状の抑制にかかっています。

また、認知症の方は自分が誰かの役に立っていたいという思いを強く持っています。それが実感できる環境を作ってさし上げることも重要です。

浦道 要介護2までの方はそのような意識を強く持っておられることを実感しますし、効果も大きいのですが、要介護3以降になると、自分に自信を失われている方もいるので、声掛けの工夫をしたりしています。

社長 認知症ケアでは、重度化してから対処療法的に入るのではなく、軽度・中度から関わって維持・改善につなげることで、BPSDを抑制できるような関わりが求められます。

宇野 訪問の現場でも認知症の方は増えており、服薬管理の依頼を多く受けます。認知症は服薬でコントロールできるようになってきました。私が関わった中に、薬を飲んでいないことで幻聴、幻視があったご利用者様がいましたが、関わりを強め、きちんと薬を飲んでいただくよう促しを続けることで、約1年でサービスを卒業された方がいます。

三木 認知症の方には、サービスにつなげようとしても自分は認知症でないと抵抗する方も多くいらっしゃいます。重度化して負担に思い始めたところで初めて依頼してくることがあります。早期発見してサービスにつなげ、しっかり管理していくことの難しさを感じます。住民サポーター等の地域コミュニティでまず支え、解決するののも一つの方法だと思えます。

社長 自分は認知症でないと思っている人に対するアプローチは、大変大きな課題です。

泉 リハビリ倶楽部でも認知症の案件が増えていきます。認知症の方々には、食事を運ぶなどの作業をお手伝いしていただいているのですが、デイに働きに来ているという感覚を持っておられるようです。人の役に立っていることを実感していただくことで、認知症の進行を抑えられるのではないかと考えています。

社長 このような事例を積み上げることが一つの線に

つながります。初期にはなるべく病識を認識してもらえようアプローチが必要ですし、服薬のコントロールにより状態が落ち着くケースも多いです。そのような状態の中で、自分たちの役割を認識できるような日々の活動があれば、在宅生活を続ける望みが見えてきます。

坂本 ケアマネジャーの立場でも、認知症の方は大変増えています。現場の方は認知症を個性と捉え、どう環境整備して役割を持っていただくかという観点から対応しており、とても勉強になっています。医療との連携も重要です。

情報は地域の方が多く持っています。それを拾い出して救いの手を差し伸べるためには、日頃から地域と交流を深め、ネットワークを広げておく必要があります。

社長 認知症の方のショートへのスムーズな受入れも、社会貢献度の高い課題です。受入れ側のスキルも当然問われます。

小林 ショートでは、施設か在宅かというラインをショートの中で見極め、確認できるような場として成功事例を蓄積していきたいと思えます。

田中 リハケアタウン全体で認知症の方の家族会を開き、可能であればその場に地域の方や居宅、訪看の方に参加していただくのもよいのではないのでしょうか。

原田 ビュートゾルフとの接点が多くないため、現在、関わり方を模索しているところです。介護保険を使うか使わないかぎりぎりの所で頑張っている方に提供できるサービスとして、買い物難民への対策などを考えています。

社長 介護保険だけで支えることのできない分野はたくさんあり、それをどうビジネスモデルとして発信できるかが重要です。私は買い物リハを提案していますが、それは外出できる可能性がある人からはその力を引き出して、外出の習慣を身に付けていただくほうがよいと考えているからです。

一方、お金のやり取りを伴うサービスが先行すると、近所同士で協力し合う等、昔ながらの互助が崩壊します。地域包括ケアシステムにおいて互助の部分は、誰かが主体的に関わらないと機能しないと思えます。

● 複合施設の可能性

田中 吉岡だけでなく茶屋町にも心歩、そしてぽっ歩保育園も出来ましたが、仕事の幅が大きく広がりましたね。

西江 私は吉岡と茶屋町の両方に関わってきましたが、その間に強く感じたのは、ニーズが溢れているということ、環境整備がまだ十分でないということです。

リハケアタウンという環境があることには、高齢者

の分野でもそうですが、子どもの分野でも、できることはたくさんあるという可能性の広がりを感じます。

今後連携を深めサービスの価値を高めることを考えると、リハケアタウン全体にどのような利用者があるのか、双方が知識と理解を深めることが大きな課題だと思います。

浦道 長谷川式やモラール・スケールなどで効果を検証しましたが、やはり子どもと接する効果は大きいのです。しかし、時間を置くと効果がリセットされてしまう方も多いので、常に一緒にいる環境が大事だと思います。交流をより深めたいと思います。

社長 保育に携わっている方にお尋ねしたいのですが、要介護や認知症の高齢者と触れ合うことは、子どもにとってどのような影響を与えるのでしょうか。

植田(有) グループホームのご利用者様と関わる機会があったのですが、人見知りだった子どもが自分から近寄ったり、一緒に遊ぶ姿が見られました。子どもと関わることで利用者様がよい方向に向かっていったこと、人見知りだった子どもが積極的になれたのを真近に見ることができたことをとても嬉しく思いました。事業所内保育所として、普通の保育所ではできない関わりに今後も積極的に取り組んでいきたいです。

社長 関わることによるプラス効果の方が高いのであれば、より積極的に取り組んだ方がよいでしょう。昔はおじいちゃん、おばあちゃんと一緒にいるのが普通でした。同じ空間の中にいる状況が、日常になるのが理想です。

何事もそうですが、必要にして必然です。特に子どもは、アクションとリアクションを繰り返す中で人格が形成されます。例えば、一つのパターンで全ての問題を解決したら、その人は狭い見の中でしたか人格形成できません。パターンを広げるためには、様々な刺激があったほうがよいのです。子どもと高齢者が出会うことを通じて得られるものは大きいと思います。

田中 リハケアタウンでは、まず形を作ることが重要だと強く感じています。

山川 デイでは、看護師の方に何度も助けられました。ご利用者様を一番よく見ているのが看護師です。看護師の方にもっとこの業界に入ってほしいと思っていますが、そのために私たちは何をしなければならないのか、いつも考えながら仕事をしています。

宇野 連絡協議会の場で、創心會のPRに努めています。また、潜在看護師や看護学生の方には、在宅訪問への同行や見学を勧めています。

新卒の方が在宅訪問するには5年程度の勤務経験が必要と言われてきましたが、そのような考え方はもはや通用しません。協議会では、新卒の教育の一環として訪問を始めました。状況は少しずつ改善すると思

いますが、まだ始まったばかりです。

社長 何事にも時間がかかります。私が訪問に出始めたころは訪問リハに興味・関心を持つ人が少なく、しかも、新卒は絶対無理と言われていました。試行錯誤を繰り返しながら発信を積み重ね、少しずつ分かってもらえるようになり、ようやく今があります。

通所介護になると福祉施設ですから、看護師の方が働く場所としての概念から若干外れているところがあります。そこに対して、看護師として働き甲斐のある場所だということを手早く啓発しなければいけません。地域包括ケアの核になる職種は看護師です。訪問と通所、看護とリハもそうですが、協働することで仕事の幅が大きく広がります。実践活動をもっとアピールしてはいかがでしょうか。

● 下期の目標

植田(貴) グループホームでは半年間満床が続いており、今後は地域交流にしっかり取り組みたいと思います。東陽中学校から職場体験の学生がよく来てくれますが、今後も交流を積み重ね、最終的には介護の現場で働く学生を発掘するのが目標です。

浦道 認知症部会で、認知症の方のアセスメントの深化を研究しているのですが、4 DASの取組みを学んで反映させたいと思います。

植田(有) 普通の保育園ではできない異年齢保育に携わりながら、他サービスの利用者の方との関わりも深め、まだ慣れない園長業務を頑張ります。

坂本 最近、「リエゾン・ソーシャルワーク」という言葉を学びました。子どもから高齢者まで、地域で困られている方に対する総合窓口という概念です。創心會には児童サービスから高齢者の就労支援まで揃っており、当社を地域の接点として、民生員、包括、社協の方に繋げていく橋渡し役にしていきたいと思っています。

三木 売上はもちろんなのですが、地域における高齢者のニーズを汲み取る意味でも、まずはしっかり訪問できるようにするのが一番です。

社長 商人の心得である「三方よし」の考え方にも通じるものがあります。多くのケースを持つことで自分の技能が向上する。多くのケースを持つことは地域の利用者のためになる。そして、会社の利益も伸びる。全ては連動しているのです。

三木 ニーズを拾い上げるため、今後は医療保険の方々ともしっかりつながりを持っていきたいと思

また、リハは色々なところできつながらがあるので、連携を通じた成功事例を蓄積して、訪問で「ここまでできる」ことを外部にも発信できるスタッフをたくさん育成したいと思

宇野 12月で管理者として3年になりますが、一定の

成果は出すことができました。スタッフの努力により機能強化訪問の2を6か月取ることができたのですが、来年はチームを強化して、さらにその上の1を目指したいと思います。そのためには常勤7名以上の定着やターミナルケアの算定数の増加が必要ですが、スタッフ一丸となって目標達成にまい進します。併せて、看護小規模多機能に送り込む人財を育てたいと思います。

小林 「開かれたショートステイ」が目標です。地域に開かれることで接遇の向上、虐待防止につながります。また、ご家族様の負担を少しでも軽減できるよう、スタッフのスキルを高めていきます。併せて、和太鼓療法による交流も定期的に行いたいと思います。

山川 百年煌の立ち上げに関わったのですが、スタッフがとてもよく頑張ってくれたことに心から感謝しています。現在、リハビリ倶楽部を利用されている方で百年煌の方がよい方もいらっしゃいます。リハビリ倶楽部との棲み分けも意識しながら、ご利用者様に少しでも元気でいただくのが一番の目標です。

原田 スタッフによいメンバーが揃っているので、地域に一層根ざしていける新しいプランニングを目指します。

泉 就労者を5名以上出すことができたので、今後もこの勢いを継続したいと思います。要支援の方が100名前後いらっしゃるの、活躍できる方はデイ以

外でも地域で活躍していただくことを念頭に、卒業生も送り出しながら新規も受け入れられる仕組みにしていきたいです。

西江 事業としての形を整えることや人財を育てることはもちろんですが、私はOTとして働く姿を啓発しているつもりで仕事をしています。今関わっている利用者の方々の中からも、一人でも、OTになりたいと思う人が出てくるのが理想です。同時に、OTという職域が確立され、魅力あるものにするための実績を一つひとつ積み上げていきたいと思っています。

田中 皆さんの目標をブラッシュアップして、より磨きをかけていくのが私の仕事です。リハケアタウンがあって創心會全体が潤うという発想を持って取り組んでください。

現在はまだ20期の途中で、実績は楽しみではありますが未知数でもあります。下期は、各サービス間でコミュニケーションをより充実させてください。皆さんが地域包括ケアの選ばれた人財と思ってもらえるよう、私も頑張ります。

社長 皆さんが面白く、そして楽しく仕事に取り組める環境を作るのが私の目標です。まだ皆さんが想像していないような構想を温めており、これから3年の間に少しずつ明らかにしていきます。そのために一生懸命頑張るので、下期もよろしくお願いします。



特集

在宅ケア組織「Buutzorg（ビュートゾルフ）」とは何か？

本物ケア推進部 佐藤 健志

オランダ発祥の、在宅ケア組織「Buutzorg（ビュートゾルフ）」今年度、創心會が地域包括ケアステーション実証開発プロジェクトに参加している事もあり、この名前を耳にしている方も多いと思います。しかし、ではBuutzorgとはどんなものか？と聞かれると、多くの人は答えられないのではないのでしょうか。

そこで今回は、オランダ発祥の「革命的」とも言われている在宅ケア組織、Buutzorgについて、簡単に説明させて頂きたいと思います。

Buutzorgは、2007年オランダで創業された訪問看護を主体とする、地域を包括的に支援する組織です。それがわずか8年の間にオランダ国内で800チーム、9000名を超える看護師を要する巨大企業に成長し、同国の他の在宅ケアサービスを駆逐してしまった、というのです。

効率がよく、安価で、利用者は質の高いサービスが包括的に受けられる。一言で言えば、Buutzorgが実践しているのは、そのようなサービスです。提供の主体となるのは、地域で活躍するCommunity Nurse（地区看護師）。日本で言えば、訪問看護師や保健師のような存在ですね。なぜ彼らが、「革命的」と呼ばれる存在となったのか。まずはオランダの、在宅ケアサービスの変遷から説明させて頂きましょう。

● ビュートゾルフが生まれる背景

オランダといえば、みなさんは風車やチューリップをイメージされるのではないのでしょうか。EU加盟国の1つであるオランダは、人口約1600万人、面積は北海道と同程度。一人あたりのGDPは13位と、世界でも上位にあります（ちなみに日本は27位）。国土の4分の3は海面より低い位置にあることから、「低地地方」（Netherlands）が国名の語源となっています。

次に、オランダの社会保障制度を見てみましょう。オランダは、スウェーデンに代表される北欧諸国と同様に、高福祉高負担の国です。医療保険は民間企業が引受人となっています。一次医療として、総合診療医としての家庭医（GP）がおり、その紹介が無い場合は

二次、三次の高度医療にアクセスできません。制度的に、日本の「かかりつけ医」よりも一歩前に行くシステムが出来上がっていると言えます。日本でいう介護保険に相当するAWBZは、国営の強制加入保険です。AWBZは、我が国同様、細分化されたサービスの組み合わせになっており、障害者総合支援法と介護保険制度の性質を併せ持つ制度、と解釈してよいと思われます。

次に、Buutzorgの屋台骨である「地区看護師」の役割について見てみます。1980年代まで、地域の健康を見守るという意味において、地区看護師は家庭医に次ぐ重要な位置を占めていました。彼らの仕事は単独、独立的で、替えの効かないものでしたが、この位置づけはシステム化を図る観点から、地区看護師“長”が管理するチームの中で、業務の細分化が進められました。

1990年以降、医療費削減の影響で、新しい在宅ケア組織が担い手の主流となります。いわゆる「ホームヘルプ」がそれにあたるもので、地区看護師の役割は、医療行為や介護職をマネジメントする役割に狭められました。地域看護と家族ケアが統合されていく中で、マネジメントと予防に関する業務の多くは消えていきました。強制的な統合によって、地区看護師は、本来の幅広い職能を発揮することが困難になったのです。

専門職組織と患者組織は、この状態を「ヘルスケアの貧困化」と捉え、質の低下について警鐘を鳴らしました。また、必要以上に人々をサービスに依存させてしまう体質から、いかに脱却するかという事が大きな課題となりました。

こうした課題に対して、利用者のエンパワメントを図る観点から市場原理が導入されました。しかし、結果として生まれた在宅ケア組織間の競争は、ケアの「商品化」をもたらし、1日にどの程度、どんな内容でサービスが行われるかというケア判定が求められるようになり、厳密な評価指標が増え、複雑化する制度によって地区看護師は疲弊していきました。

結果として残ったのは、数多くの人間が入れ替わり

ながら一人の利用者に関わり、十分な意思疎通が行われず、複雑な制度運用の間接コストが増大するシステム。このようなシステムでは、専門職はその本来の職能を、十分に発揮することが出来ない。「このような流れが、Buutzorg設立のモチベーションに繋がった」と、CEOであるヨス氏は説明しています。

● Buutzorgとはどのような組織なのか?

Buutzorgは2007年に、4人の看護師を1チームとして始まった在宅ケア組織です。それが8年ほどの間に、800チーム9000名を超える看護師を要するまでに至るといえるのは、驚くべき急成長と言えるでしょう。

1つのチームは、看護師等が最大12名の小規模な編成からなり、人口約1万人のエリアを担当します。この“人口1万人”という概念は、我が国の地域包括ケアシステムの定義における、日常生活圏域の設定人口と合致します。1チームが担当する利用者は、およそ40～60名となっています。

Buutzorgの所属する看護師の、半数以上は学士レベルの看護師であり、専門性の高い組織と言えます。オランダの資格制度が日本と大きく異なっている点は、介護福祉士から看護師への一貫性のあるキャリアアップが可能となっている所にあります。例えば、全く未経験の場合でも、介護士としてチームに入り、仕事をしながら学んで、学士レベルの看護師を目指す、というキャリアパスが成り立つのです。この点は、看護師にとっても、介護士にとっても有意義なことではないかと思われました。

またBuutzorgでは、「情報収集→アセスメント→プラン作成→訪問看護と身体介護の提供→評価」という一連の過程を、担当看護師が担うプライマリケアが基本です。この中には、訪問介護に相当する援助や、ケアマネジメントも含め、一括して実施する事になっています。その結果、プロ集団による一貫性のあるトータルケアが提供できるようになり、制度に翻弄された細切れのサービスの組み合わせより、結果としてコストも安く、利用者満足度、スタッフの満足度ともに高い、という成果をもたらしました。だからこそ、Buutzorgは「革命的なサービス形態」として注目されるようになったのです。

このBuutzorgのナレッジを、日本の介護保険制度に持ち込もうという試みが、今回我々が参加している「地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト」です。それは、新しい介護保険サービスを創る試みでもあります。まさしく、介護保険制度に「革命」を起こすカギとなるサービスかもしれないのです。

● 地域包括ケアステーション

ここまでの情報を総括すると、「本当にそんな自律性のあるチームが運営できるのか?」「文化が違うからムリじゃないか?」など、様々な疑問点が湧いてくると思います。しかし、同様の疑問は、オランダでヨス氏がBuutzorgを立ち上げた時にも見られた、との事でした。私たちは日頃、介護保険で仕事をしていますが、官僚主義的で複雑な制度設計や、次第に先の狭まる制度改正に辟易としている、というのが、偽らざる本音だと思えます。「国はもっと私たちの職能を信じて、任せて欲しい」という想いを、誰しも持っていると思えます。この“想い”を形にすることが、地域包括ケアステーションに関わる我々のミッションなのだと理解しています。

目の前のご利用者様に、専門職として必要なことを提供する。小規模のチームで包括的にマネジメントし、自立支援の観点から、自分たちに対応できる範囲でサービスを組み立てるのです。ただし、提供されるサービスに対しての責任をきちんと追う、それが出来るための専門性を養う、という事が求められるわけです。

地域包括ケアステーションは、制度化に向けて、まだ具体的な姿を現してはおりません。ただ、プロジェクトを通じて予測される姿は、おぼろげながら描くことができます。最後に、そのサービスの姿を、あくまで個人的な予測という観点から記しておきたいと思えます。

地域包括ケアステーションとは…

- ・およそ人口1万人の、日常生活圏域を対象としてサービスを提供する。
- ・訪問看護師、OT・PT・ST、ヘルパーによってチームは構成される。
- ・チーム構成は上限が12人で、独立的、自律的に運営される。
- ・マネジメント機能は、ステーションに内包する。
- ・チームはすべての訪問サービスを包括的に提供する。
- ・後方支援としてコーチとバックオフィスを有する。



特集

～「活動」と「参加」へのアプローチ～

ADL評価モデルへの参加、そして和久への挑戦

訪問看護リハビリステーション
サテライト笠岡

作業療法士 亀谷 滯



はじめに

今回、社会参加を目標としているご利用者様と関わる機会をいただいた。訪問看護、リハビリ倶楽部、グループ会社であるハートスイッチ、和久ステップ笠岡（就労継続支援B型事業所）と連携しアプローチすることで、社会参加への第一歩を踏み出すことができた事例を体験させていただいたため、以下に報告させていただきます。

ご利用者様紹介

A様、50代後半の男性。平成25年5月に慢性腎症、ネフローゼ症候群で入院、一時透析を行い、退院後復職するも平成25年11月に後縦靭帯骨化症を発症。入院中に勤めていた会社が事業廃止となり退職となる。脊椎手術後の後遺症として両上下肢の筋力低下、感覚障害、運動麻痺がある。また、腎臓機能低下により食事の制限や疲労をためない等の体調管理の制約がある。

両親と3人暮らしであり、入浴、更衣動作、食事において介助を要するが、できることはご自分で行われている。外出は病院受診とデイサービスのみであり、資格取得の為に勉強や決められた自主訓練に継続して取り組まれている。

平成26年11月からリハビリ倶楽部笠岡を利用する中で、「シャツの着脱ができるようになりたい。それができるようになってから車の運転、就労と段階をおっていきたい。」との希望で、平成27年5月から訪問看護からのリハビリを追加で週2回利用となる。

経過と結果

<介入から和久ご利用に至るまでの流れ>

- H27.5/ 5 初回訪問
- 6/ 4 ADL作業評価モデルの提案
- 6/16 ハートスイッチによるADL作業評価モデルの説明
- 8/17 ADL作業評価モデルへの参加
- 8/18 和久に興味を示される
- 8/19 和久ステップ笠岡から説明を受ける
和久見学
- 10/ 1 和久初出勤

<5月～ADL向上の時期>

訪問開始当初は、A様の短期目標である「シャツの着脱の自立」に対してアプローチを行った。上肢の筋力訓練、更衣動作練習、自主訓練の提案、身体面や生活への不安・疑問について確認し、具体的に説明することで不安の解消に努めた。A様と目標を共有し取り組んだことで、右上肢の筋力向上やシャツの着脱がしやすくなってきたとA様は成果を実感される。この頃、A様との関係性ができてきたと感じられた。

<6月～参加に向けて心づくりの時期>

あらためて就労に対する思いを確認すると、A様から一般就職が障害者雇用か悩んでいること、障害のある方のサポートがしてみたいといった発言が聞かれた。そこで、他者にご自分のことを分かりやすく伝えられるA様の利点を活かして、ハートスイッチのADL作業評価モデルの提案を行った。内容に興味を示されたが、A様は参加しても人前で上手くしゃべられるのかという不安、ご家族様は障がいのあるA様がさらし者になるのではないかと不安があると分かった。そこで、ハートスイッチとも連携し、ご自宅でA様とご家族様に対してハートスイッチから説明を行った。実際に映像を見て疑問を解消できたことで、A様はADL作業評価モデルへの参加を決意された。当日までハートスイ

ッチはA様にこまめに連絡をとって、モチベーションの管理を行っていた。私が訪問した際には毎回のように参加に向けての意気込みや不安などを話され、当日の不安をできるだけ軽減できるようにこちらから分かることはお伝えし、分からない点はハートスイッチからも説明を行った。

<和久ステップ笠岡利用に向けた時期>

ADL作業評価モデル参加後、A様は働くことは自身の存在を認識することに繋がると実感された。また、同じ送迎車の中に和久ステップ茶屋町を利用しているご利用者がいたことで和久ステップ笠岡に興味を示されるようになった。そこで、和久ステップ笠岡から説明を受け、その後A様はご家族様と施設を見学、9月には1日2時間、2日間の作業体験に行かれた。また、腎臓病により疲れをためないことが条件であるA様にとってケアマネジャーの理解も必要であり、その点に関してはリスク管理の相談を行った。無理のない範囲で作業を行っていただく事、作業後の訪問で体調の確認を行いA様の体調変化に関してこまめに連絡を行うこと、体調の悪化が見られた際には利用の中止も検討することとした。A様もケアマネジャーと和久ステップ笠岡への思いを話し合わせ、10月から週に2回、1日2時間の作業を行うこととなった。

<和久ステップ笠岡利用開始、そして今>

初出勤までの間、「今は閉じこもりがちだが、やっぱり出たい。和久で（働く為の）ベース作りをしたい。」と数年ぶりの働くという機会を楽しみにしている様子が感じられた。

初出勤後、A様は「和久は周りの“人”という存在がモチベーションを上げてくれる。人の中にいるという感覚があった。デイサービスは与えられた訓練を一人でこなすが、和久はチームであり責任感がある。」と感じ、心配していた体調の悪化もなく現在も和久ステップ笠岡での仕事を継続されている。今のA様の目標はチームに少しでも貢献できるよう短い作業時間内でいかに効率よく作業を行うかであり、訪問時には毎回その日の作業内容について報告してくださっている。

● 考察

A様は50代半ばで腎臓病、後縦靭帯骨化症を患い、離職を余儀なくされた。「神様、仏様はいない、人は平等ではない」といった発言をされ、大学時代の友人が現役で働いている姿と今のご自分を比べて友人をうらやむ発言も聞かれていた。障がいをおったことによる

離職が社会との繋がりを薄れさせ、働くというご自身のアイデンティティがなくなり、今後の再就職への可能性が見えない状態であると考えた。A様は社会復帰を強く望んでいるが、障がいがあっても社会参加ができるという可能性については見出せていなかった。私はA様と関わる中で、グループ会社であるハートスイッチのADL作業評価モデルや和久ステップ笠岡でのネギの出荷調整といった作業であればできるのではないかと感じ、グループ会社と連携して提案したことでA様の社会参加に繋がったと考える。

● 事例を通して私が学んだこと

A様との関わりから私が学んだことは2つある。1つ目は、OTが可能性を見出し、ご利用者様にもその可能性を感じていただかなければならないこと。そのためにはOTだけでなく多職種の方と連携することも大切だということである。

2つ目は、百聞は一見にしかずであるということ。それはご利用者様だけでなくご利用者様に関わるスタッフも同様だと学んだ。私は去年の夏、先輩OTについてハートスイッチのADL作業評価モデルに参加させていただき、活動内容について知ることができた。その活動があることは知っていたが、具体的な内容を知ることができたのはその体験があったためである。また、笠岡地域には和久ステップ笠岡があり、訪問途中に見学や作業体験をさせていただいていた。これらの経験があったからこそ、A様に合った活動、作業であるか評価することができ、A様に提案する際にもより具体的に説明することができたと考えられる。また、A様自身も働きたいという希望はあったが、当初は漠然とした思いであり、具体的に雇用形態や仕事内容などまでは思い描いていなかった。今回提案させていただいた2つの活動をA様が受け入れられたのは、私からの口頭説明だけでなく、ハートスイッチや和久ステップ笠岡との連携により、映像を用いての説明や見学対応を行うことによって具体的に活動の様子を知ることができたということが大きかったと感じている。また、月に1回の笠岡グループ会議でお互いの情報共有をすることでA様のその後に対してもフォローアップすることができ、今も継続して働くことができている。

ご利用者様を取り巻く社会資源の情報を得ることも私たちの役割だと思う。まずは社内のことから、そしてグループ会社、さらには地域の中にある社会資源へと得るべき情報は無限にある。情報を得るにはいろいろなことに興味を持つこと、介護業界だけでなく違う職種の人とも話をして他分野の情報も積極的に集めることだと考える。ケアに携わる私たちがどれだけ社会

資源を知っているかでご利用者様に提案できる可能性が何通りにもなり、ケアの質も向上すると考える。

A様は和一至で働くためのベース作りをし、その先に企業への就職も見据えている。今後A様が外部企業への就労に挑戦する際、今の私にはA様に提案できる情報はない。A様に対してだけではないが、関わらせていただいているご利用者様に対しても必要なときに必要な情報提供ができるよう、今後はもっとアンテナを張っていききたい。

最初に入院したのはまだ50代半ばで、取り残され感が非常に強かった。非常にあせっていた。少しでも早く社会復帰したい、それだけだった。今、自分が望めるとすれば、現在の自分が表現できることで社会参加したい、という事。体力が回復し、貢献とまではいなくても、参加できることがあれば、出て行きたいとは思っている。

段差が多い環境を整備し、日常的に庭に出られる状態に改善した事例

訪問看護リハビリステーション
サテライト岡山



理学療法士 時耕 敏夫

はじめに

ご利用者様に、安全で安定した在宅生活を続けて頂くために、身体機能の向上と共に、生活上の環境を整えていく必要が出てきます。今回は、農家の古い家屋で、特に、生活上、支障がある事例を紹介させていただきます。

症例紹介

Y様：80歳代 女性

疾病：両変形性膝関節症、左肩関節脱臼

リハビリ利用の経緯：農家の古い家屋のため、段差が多く、また、廃用が進行しており、室内で過ごされることが多い。同居の娘さんは、日中、仕事に出ておられる。環境整備と活動性向上を図り、外出支援をして欲しいとのご家族、ご本人の希望により、3ヶ月期間限定の訪問看護（リハビリ）利用を開始された。

課題

(1) 屋内環境において、段差が多いので、移動の安全性確保が必要である。

①自室からトイレまでに25cm程度の段差がある。

②土間を下りる際に、30cm程度の段差がある。

③土間から玄関扉までに傾斜路がある。

A様が「気持ちの変化」と題してパソコンで書かれた文章の一部である。障がいのある方の中にはA様と同じ気持ちを持った方がたくさんいると思う。その方たちの可能性を見出すことがOTの役割だと感じている。

おわりに

この度、社会参加に繋がったご利用者様のことを執筆させていただく機会を得て、様々な職種の方が一人のご利用者様を取り巻いており、一つの目標に向かってお互いに情報共有や連携をしているのだと実感することができた。そして、多くの学びを得ることができた。

今回の執筆にご協力をいただいたA様をはじめ、ご家族様、スタッフの方々に深く御礼申し上げます。

(2) 日中、一人で過ごされ、他者との交流がない。

娘さんは、日中、仕事で出ている。

(3) 膝関節症、肩関節脱臼のため、生活動作に支障が見られる。

目標

・屋内、屋外での移動・移乗動作が安全で、スムーズに実施できるようになる。

・日中、庭で過ごされ、近隣との交流ができるようになる。

取り組み

(1) ①段差解消のための踏み台の設置と設置型手すりの設置。後ろ降りでの動作の練習。自室からトイレまでの距離が遠く、空間が広いので、歩行器（四点支持）の利用を実施。②段差解消のための踏み台の設置と柱に縦手すりを付け、上肢の支持を利用することで、動作の安全性を確保する。③土間に靴箱があり、設置型手すりの設置が難しかったが、靴箱の下に設置版を配置することで、設置空間を確保でき、安定した設置が可能になった。

(2) 娘さんが出られた後、庭の出入り口の門扉に、鍵を閉めて置きたいとの事で、庭の移動、門扉の施錠をするための訓練を実施する。庭の移動においては、押し車を利用し、門扉の施錠までは、可能になった。押し車を玄関前の柱に押しつけるような位置に置いてもらうことで、玄関から押し車までの移乗が、スムーズにいけるようになった。それに伴い、門扉にある郵便ポストの郵便を取りに行くことも可能になった。また、庭で日中を過ごせるように、家にあったベンチを設置していただき、立ち上がりの動作訓練を実施することで、ベンチで過ごすことも可能になった。

(3) 膝関節症の予防、肩関節脱臼の痛みの緩和のため、自主訓練（椅子座位での膝屈伸運動、立位でのスクワット。ベッド仰臥位での肩関節の挙上運動等）の実施をお願いする。肩の痛みも改善し、左上肢での押し車の支持、手すりの支持が安定してきた。また、段差の昇降もスムーズに実施でき、歩行時の下肢のコントロールも向上してきた。

● まとめ

今回の事例は、身体上の課題解決と共に、生活環境をご本人の目標に沿って、改善していくことで、屋外に出ていけるようになり、活力、気力の向上が図られ、さらなる希望が生まれてきたものと感じる。リハビリ中に、娘さんが時間をとって、しっかりリハビリの内容を観察しておられ、母親の日々の自主訓練のサポートをされていた。娘さんの母親への強い想いが伝わってきた。その想いが母親の一步踏み出す勇気につながっているものと

感じる。

訪問によるリハビリは、期間限定にて、終了となったが、ご家族、ご本人ともに当初の目標がほぼクリアできたことに満足されておられた。今後、宅急便の対応、娘さんが手入れしているブルーベリーをいっしょに育てたいとの希望も出てきている。また、何か困ったことがあったら、創心會さんに相談させてくださいと言われていた。

● おわりに

環境改善を中心に実施したが、結局は、ご利用者様の気持ちを動かすことが、非常に重要であると感じた。「心に寄り添う」という創心會の理念を再度、認識できた。ご利用者様の持っている能力を最大限に生かし、環境の改善を行い、ご自宅での生活を安心して過ごせるようにしていくことができたことに、喜びを感じるとともに、協力して頂いた皆様に感謝している。

活動、参加に向けたアプローチとは



リハビリ倶楽部茶屋町

社会福祉士 登喜 望

● はじめに

今回、若くして脳梗塞後遺症を呈し、病前好きだった旅行に行く機会を失っていた方に対し、旅リハ参加に向けてアプローチし、実現することができた事例を報告する。

この事例から、今わたしたちが取り組んでいる活動、参加へのアプローチについて私自身、その必要性和重要性を感じることができたため、述べさせていただきます。

● 症例紹介

A様 (50代) 女性 要介護4

平成X年 左被殻出血

X+1年12月 右視床出血

X+2年12月 脳出血発症

X+3年 6月 両親のいる実家へ退院

デイサービスではウォーカーケインを使用し歩行。(近位見守り)

言語障害があるが、お話好きでコミュニケーション可能。

現在、ご両親と自宅にて生活。主たる介護者はご両親。

● 旅リハ参加へのきっかけ

平成27年3月のことである。平成27年6月のリハビリ倶楽部茶屋町リニューアルオープンに向け、二神社長が現場に入り、リハビリを実践して下さっていた。この際にA様も見ただけのことになり、これがA様と二神社長の出会いとなった。二神社長はA様に目標を尋ねた。A様は、「旅行に行ってみたい。」と答えた。私たちデイサービススタッフもこの目標については以前から知っていたが、方法が明確ではなく実践には至っていなかった。そこで二神社長が「旅リハに行こう!」とおっしゃった。A様は旅リハという企画を知られていなかった為、その時は戸惑ったご様子だった。この時、1ヶ月後の4月に「呉、大和ミュージアム」への旅リハの参加者募集をしていた。タイミングも良いと思い、A様をお誘いした。二神社長をはじめ、他のスタッフもA様にお誘いの声をかけてくださったが、なかなかうなずいてはくれなかった。

その時点では、A様はデイサービスフロア内では、スタッフ見守りのもとウォーカーケインを使用して歩行をしていた。しかし長距離での歩行に対する不安は強く、旅行に行くという考えもなかった。また、A様の一番の不安はバスの乗り降りだった。バスの段差が高いということは認識されており、階段を上るという行為も訓練もしていなかった為、ご自分でも想像ができなかったという。しかし、A様の旅リハ参加は身体機能的には決して難しいことではないと感じていたため、あとは、A様の気持ちの部分を支援していくこと

が必要だと思った。

すぐに1か月が経過し、4月旅リハの閉め切りの日。A様は「誘ってくれたのは嬉しいけど、自分にはやっぱり難しい。」と素直な気持ちを述べられた。私自身、A様の気持ちを動かす支援が具体的にはできておらず、不安を取り除くサポートも出来ていなかった。そのことを反省し、自分自身が旅リハに参加し、A様に、旅リハの魅力と不安を取り除けるよう必要な訓練についてお伝えしようと思った。そして、A様と、次回の10月の旅リハに参加しようという目標を設定した。また、ご家族の意見も大切にされるA様は、ご両親の意見も聞かないと分からないとおっしゃっていた為、ご両親に対する働きかけも必要であった。

● 支援プログラム

① デイサービスでの動作訓練

デイサービスでの訓練としては旅リハに必要な動作を徹底的に練習した。階段昇降はこれまでデイサービスでも実施したことがほとんどなく、恐怖心が強かった。足を出す順番が分からなくなり、動作が止まり、その場で力が抜けて座り込んでしまうなどして、気分が落ち込まれる時もあった。しかし、スタッフと交わす「旅リハに行く！」を合言葉に、練習を続けた。

② スタッフ協力

どのスタッフも応援してくれているという雰囲気作りをしたいと思い、スタッフ間での、目標の共有と、提供メニューの統一を図った。旅リハに向けて階段昇降と、長距離の歩行訓練を提供するようにスタッフの方向性をそろえた。ご本人様はもちろん、スタッフも目標を見失ってしまうことのないように気持ちをそろえることが目標達成に向けて大きな一歩になることを感じた。

③ ご家族支援

不安な気持ちはご両親も同じように抱えていた。ご両親の不安を取り除けるよう、そしてご両親にも応援していただくため、ご両親向けに今A様が実践している「旅リハ挑戦プログラム」と題した、写真を用いた一枚の便りと手紙を書いた。階段昇降の訓練をしているご様子やスロープや段差があるフロア内を歩行しているご様子などを撮影したものを添付し、ご両親にも笑顔で送り出していきたいという気持ちを込めた。そして、10月の旅リハの参加者募集時期。A様のご両親から、「よろしく願います。」の一言が添えられた旅リハの参加申し込み用紙をいただいた。そのご両親からの一言に、これまでの支援の成果と、当日への期待を感じた。後日、A様の旅リハ参加の旨を二神社長に報告させていただいた時、全身で喜びを表現して

くださった。ご利用者様の目標達成が見えた時、こんなに喜びを感じられることにとっても感動した。心に寄り添うとは、このようなことなのだろうと思った瞬間でもあった。

● 旅リハ当日

平成27年10月4日(日) 本部ブロック旅リハ「旧閑谷学校、日生、おさふねの旅」に参加。当日は天候も良く、参加者40名の規模の大きい旅リハとなった。A様含め、初参加者が15名であった。さて、A様一番の不安だったバスの乗り降り。前後からの介助により無事に乗り降りできた。何度か、段差を降りる途中で膝折れがあり、スタッフが食いしぼる場面もあったが、この日ばかりはご本人も強気で「大丈夫、怖くない。」と前向きな発言で私たちを安心させてくれた。旅行中は車いすでの移動が主ではあったが、何度も訪れたことのある閑谷学校も、また違った雰囲気を楽しめたようだ。最後にはご家族にお土産を買った。お土産を選ぶ際、ご両親のことを思う表情に、ご両親への日ごろの感謝の思いを感じた。A様からは「また行きたい。」という、私たちにとって一番嬉しい言葉が聞けた。

● その後・・・

今でも階段昇降は、A様のメニューとして継続されている。現段階では、旅リハ参加前と比較しても、膝折れもなく、足にしっかりと力が入るようになり、介助に頼りきらないA様の力強さを感じている。A様は「私の経験が、同じように障害を持った人の勇気につながると思う。」とお話してくださった。また、ご両親にもお話を伺いし、その時のお気持ちを教えていただいた。ご両親としてもA様が旅行に行けたことは嬉しかったようで、A様からお土産を受け取った時は、またこうしてお土産がもらえるとは思ってなかったから、お土産をもらって、「ああ、行けたんだなあ。」と実感したという。

● 考察

この事例を通して、ご利用者様への活動、参加のアプローチとは何かを改めて考える機会となった。介護保険制度改定や、現代社会の流れにおいて、現在我々デイサービス職員は、要介護者の自立や、自助、互助の力を引き出す役割を担っているといえる。そのため、今やるべきことは、ご利用者様自身に、「できる」を感じていただくことである。

今回A様は、実際にご自分で旅行を経験したことで、ご自分の可能性を知ることができ、「また行ってみたい」という言葉が自然と出た。今後は、A様が旅行経験者

となり、次の方へとつなげる役割を担っていただけると思う。だれかの活動が、他の人の参加につながることを感じた。私が考える、活動、参加のアプローチとは、人と人のつながりを創ることである。人と人が関わることで、自分自身、役割を持った活動につながる。そしてその活動を活かして、参加という他者との交流の場へと出向くことができる。

今回の事例では、ご家族にも自信をつけていただくことができたと感じている。また、要介護者を支えるご家族に伝えたいことは、ご家族だけが抱える問題ではないこと。私たちのようなデイサービススタッフや、ケアマネジャー、その他とりまく人たちがみんな協力者であることを伝えたい。ご本人様の活動参加の場が増えることで、いままで介護をしていたご家族自身も時間にゆとりができ、活動の幅も広がるのではないだろうか。

一人の活動が、また別の人の参加につながる、とは、ここでも言えることだと感じる。

● まとめ

6月にハイブリッド型デイサービスとしてリニューアルオープンしたリハビリ倶楽部茶屋町。ご利用者様が主となり、ご家庭での生活を継続できるよう、家庭で必要な炊事、洗濯、掃除などの家事動作訓練などを積極的に取り入れたメニューを提供している。また、就労支援に向けた訓練にも力を入れており、和一久と協力させてもらいながら、お仕事訓練も実施している。身体機能面の向上プログラムだけでなく、機能訓練の先の目標に向かって、生活の質を高めるプログラムも提供していくことが、私たちの役割である。サービスの幅も広くなり、私たちも今まで経験のないことばかりで毎日が新しい挑戦の連続である。それらの活動を通して、「いままでやったことのなかった料理をやってくれるようになった。」「家でも洗濯物を干してくれるようになった。」などにご家族様から嬉しい声をきかせていただくことも増えた。そのような声が聞けた時、まだまだ活動できる方々の出番、役割を増やせるということを実感できる。「まだまだ活躍できる場を！」そんな応援ができるデイサービスでありたいと思っている。

● おわりに

今回の執筆にあたり、事例提供に同意してくださり、身をもって「活動・参加」が持つ可能性を教えてくださいましたA様、ご家族様に感謝を申し上げます。

デイサービスの生活相談員として、ご利用者様ご本人様だけでなく、ケアマネジャーや、ご家族とお話を

させていただく機会も多い。それぞれの思いを受け、感じることは、創心會は期待されているということ。この「期待されている」ということを良い刺激と受け止めて、この環境に感謝し、今後もスタッフの皆様とともにリハビリ倶楽部茶屋町を盛り上げていきたい。



出来るを伝える。感じた チームケアの大切さ。



訪問看護リハビリステーション

作業療法士 水口 勝貴

はじめに

創心會訪問看護リハビリテーションに所属し、早半年以上が経過する。作業療法士としても社会人としてもまだまだ経験が浅い。しかし、新人の私でもチームケアとして関わる事により、目標や意欲を引き出せ生活が豊かになった事例を担当させていただいた。今回は新人でも連携する事でよりご利用者様の心に寄り添った関わりができ、連携の大切さを知ることができたので、以下に報告させて頂く。

事例紹介

A氏 70歳代 女性

疾患名：脳梗塞後遺症、高次脳機能障害

発症経緯：B県の自宅で夫と二人暮らしであった。孫が中学生になった時学校に近い現在の場所に家を建て、孫の世話をする為に長女と3人で暮らす。孫中心の生活を送っていた。平成X年2月に自宅で倒れている所を発見され、C病院へ救急搬送される。リハビリ目的で4月に転院。

チームケアで目標達成！

5月に先輩社員の同行訪問、引継ぎがあり担当となってから約6か月となる。私の介入した当初はA氏、ご家族とも関わりが浅く、信頼関係の構築もできていなかった。まずは信頼関係を築こうという自己目標を立て、傾聴を中心しつつ、自身の紹介、生活状況や世間話といった会話を重視した関わりを積極的に行った。それによりA氏、ご家族ともに私に興味を持って下さり、6月からいよいよ本格的なリハビリが開始となる。リハビリ開始当初の日常生活としては、日中は主に臥床傾向にあり、移動や更衣、食事などにも多くの介助を要していた状態であった。また高次脳機能障害により、集中の持続等も困難な状態であった。この時の要望としてはA氏、ご家族共に独歩可能になる事、麻痺側上下肢が動かせるようになる事など、身体機能的な回復への期待が強い状態であった。この様な希望・期待を抱くのは当然であるが、生活期では身体的回復を大きく望むことは厳しい。専門職として現実・予後予測をどう伝えればいいのか大いに悩んだ。言葉の選び方、タイミング、反応等…。そして悩んだ末出た答

えは、まとめて伝えるのではなく、動作一つ一つを行うときに伝えるという事である。例えば歩行訓練では「今は杖を使って大分安定して歩けるようになりましたね。でもたまに3歩進んで4歩下がる…の様に後ろへバランスが崩れてしまうので注意しましょう。この先娘様が横について手を持ちこの様な歩きは可能になる事が考えられますが、杖なしでは機能面等からも厳しい事が予測されます。しかし杖をしっかりと使う事で転ぶ危険性も軽減し、A氏も安心して歩く事ができますよ…」という様に、現状の出来る点と注意点、そして正直な予後予測を伝えた。そうする事でご家族も次第に現実を見始め、過介助が、歩行訓練等の自主訓練指導も受けて下さった。

リハビリ内容として、介入当初は機能訓練（関節可動域訓練、筋力増強訓練、麻痺側促通訓練等）を実施していた。しかし、私の中でもこのままで良いのかという疑問と、この内容でA氏、ご家族を期待させてしまい効果が薄ければ責任はとれるのか、と考える時期もあった。更にこの時期はまだケアマネジャーやデイスタッフとの連携も少なく、一人で悩むことが多かった。このままではいけないと感じ、まずは兼任の先輩療法士と現状のリハメニューの相談を行った。そして機能訓練よりも活動を中心に行った方が良いという結果になった。それからは立ち座りからの車イスへの移乗訓練、装具着脱訓練、更衣訓練、車椅子自走訓練等の活動を主体とした訓練を実施した。

そしてこの時期から私は多職種とも積極的な連携を行うようになった。

実際の連携の内容としては、ケアマネジャーの勧めにより、7月から百年煌倶楽部が開始となる。訪問リハビリにて、変化があった場合ケアマネジャーへの状況報告、連絡、相談を行った。ケアマネジャーからも関わった際に変化があったり、新たな情報あったりすれば、それらを共有して頂いた。A氏が身体的回復に悩みを抱き、デイサービス等を連続して休まれた期間では、私はその際のA氏の心境をケアマネジャーに伝え、ケアマネジャー本人がA氏と話し合い、プラン変更の提案や、再度リハビリの重要性や将来像について心に寄り添った対応をして下さった。その情報を私も聞き、再度目標の確認、リハメニューの改善を行う事に至った。A氏にとって意味のあるリハビリを改めて考えられる良い機会となった。

8月頃にはデイサービススタッフへは訪問リハビリ実施内容と自宅内環境や自宅内生活の様子を伝え、情報共有を行った。スタッフへ伝える際、環境は図で、内容は文章で伝えた。スタッフからは、デイサービスで行っているサービス内容、デイサービス内での過ごし

し方などの情報を提供して頂けた。また、デイサービスでは立ち上がり訓練等を行って頂けるように相談した。

連携する中でご家族の「もっとできる事が増えて欲しい。一緒に買い物へ行きたい。」という要望、A氏の「ずっと立ちたい。娘と買い物へ行きたい。」という要望を聴取し、合意目標を設定した。

短期目標（1ヵ月）、立ち上がり、移乗をスムーズに行え、車椅子自走にてトイレへ移動できる。

長期目標（3か月）、娘様・お孫様と近隣の店へ出掛けられる。（店内は車椅子）

こうした連携を図りながら関わった結果、ベッドや車椅子からの立ち上がり動作が安定且つ楽に行えるようになった。A氏自身もしっかり立てる様になったと、実感の声を頂けた。ご家族も介護負担の軽減に繋がり、より目標達成・リハビリに対して意欲的となった。

A氏は身体的回復を望む気持ちが大きいですが、立ち上がり動作が行い易くなった実感や、安定して移乗が行える様になった事、車椅子自走でトイレまで移動する事ができるようになるなど、短期目標達成に至った。

9月には娘様、お孫様と一緒にゲームセンターへ行きたいという意見が聴取できた。今まで買い物へ行きたいなどの話しはあったが、この時話して下さった内容・言葉にはその頃強い想いが伺えた。これは外出への大きな一歩であり、チャンスでもあった瞬間であった。UFOキャッチャーは当時の様に立位で行う印象がA氏には強くあった。A氏の立位バランスは中等度介助が必要な状態であった。しかし、ようやく出た外への第一歩の気持ちであった為、リスク管理を行い、介助有りでも行って頂きたいと思った。リハビリでは立位保持訓練を中心に実施。ただ立位をとるだけでは苦になる為、何か良い方法はないか、環境面を再度確認させて頂いた。その際洗面所の大きな鏡があり、鏡の前へA氏を誘導した。するとA氏は自身の身なりを気にされたり、鏡を見て綺麗にしたいという発言をされたりした。そこで立位での鏡磨きを提案し実施させて頂いた。その際は麻痺側や後方へ倒れやすい事、右下肢へ重心を置き、前方の支持物（机等）へ体もたれさせること等、要点やリスクも伝えた。そしてついにA氏は外出し、ゲームセンターでUFOキャッチャーをされたとのことであった。想像以上に立位保持に介助を要したとのことであったが、ご家族も外出できたことを何より喜ばれていた。

ご家族、A氏の最終的な希望としては韓国旅行であることを聴取させて頂いた。過去に韓国旅行をされ、その時の思い出が強くどうしても行きたいとのことである。その為には、飛行機・現地の環境・A氏的能力・ご家族の介助力等…まだまだ評価すべき点はたくさん

ある。しかしA氏・ご家族の強い絆と想いを感じた私は、今後も多職種と連携し、未来の可能性に挑戦したいと思った。そして最終的に海外旅行へ繋げ、只々諦めずに頑張る良かったと思えるようなサービスをチームケアの一員として提供したいと思う。

● 連携から感じた事

私が学生の頃からよく耳にした言葉。「連携・チームケア」。大まかには多職種・ご家族・本人様が一丸となってサービスを行うという事で、更には地域社会とも繋がり地域全体で支え合う事である。このチームケアを実際に取り組む事ももちろん初めてであった。ここで感じたことは、何よりも心強いという事が一番大きい。専門職同士が互いに関わるから心強いという思いもあるが、創心會では「人間としての資質を高める」という点に重視しており、これは人間としての資質＝個性を磨き個々を高めるという事である。性格・話し方・表情・考え方・長所や強み等…それぞれを最大限に活かしているからこそ報告・連絡・相談もし易いし、A氏に対しての対応も違えば、返ってくる反応も違う。その観点から新しい情報や見えなかったものが見えてくることに繋がる事は私は知ることができた。そしてその事がご利用者様の心に寄り添う関わりとなる事も学ばさせて頂いた。一人で提供するサービスの質よりもより質の高いものが提供できたと感じている。

● マネジメントできる作業療法士

今回A氏を担当させて頂き、私は創心會人で良かったと実感している。これほどの多職種が同事務所内で関わり合い、本人様だけでなく、ご家族も巻き込んだサービスが提供できる環境は他では少ないのではないかと思った。こういった連携の良さを体感できた中で、もっと多職種の職の内容を知らなければならない事、伝え方を工夫しなければならない事など自分に足りない部分も学ぶことができた。私は今後、多職種やご利用者様及びご家族、あるいは学校などへしっかりとマネジメントできる作業療法士になりたいと思った。その為にはもっと作業療法士としての知識を身に付けないといけないし、常に多職種との関わりを意識しないといけないと感じた。互いに伝え合う事さえできれば連携は可能であるがその「伝える」といった点にも奥深さがある。これからも多職種と関わり、その人その人の「個」もしっかりと感じ、良さを取り入れて理想の作業療法士像を目指し精進していきたい。





地域ボランティア資源の開発

株式会社ハートスイッチ 井上美由紀

はじめに

地域包括ケアシステムの推進に向け、地域の中に「自助・互助・共助・公助」のしくみを確立することが望まれる。株式会社ハートスイッチ（以下ハートスイッチ）では、地域におけるボランティア資源の開発を促し、住民主体の地域づくりの支援について取り組んでいる。ここに、これまでのハートスイッチの取り組みを紹介させていただく。今後、ボランティア資源を創心會グループとしてどう活用していくか、各々の専門的視点で捉えながら読んでいただくと幸いである。

地域資源についての調査

倉敷市では、2010年より高齢者の方が積極的に地域に貢献することを奨励、支援し、社会参加活動を通じた高齢者自身の健康増進を図ることを目的としたボランティア制度「介護支援いきいきポイント制度」が導入されている。また、倉敷市社会福祉協議会が主体となり、高齢者や障がい者の家事援助サービスを行う住民参加型有償サービス「倉敷たすけあいサービス」も導入されている。これらの制度概要および2014年度の活動実績を表1に示す。

また、倉敷市には概ね小学校区を単位とした地区社協が設置されており、市内64学区のうち50学区に設置されている（2015年3月時点）。地区社協は、地域の各種機関・団体やボランティアによって構成され、

表1 倉敷市における「福祉のまちづくり」制度

	介護支援いきいきポイント制度	倉敷たすけあいサービス事業
概要	65歳以上の方が介護施設等でボランティア活動を行うことで、地域に貢献するとともに高齢者自身の介護予防と健康増進を図る。活動の実績に応じてポイントを集め、翌年度にポイントを換金することができる。1時間の活動=100ポイント=100円、年間5000ポイント/人まで。	高齢者や障がい者、父子母子世帯、妊産婦などが日常生活上の家事や介助で困っているとき、「困ったときのたすけあい」の心を持った地域の人々（協会員）がそのお宅を訪問し、身の回りのお手伝いをする。会員同志の支えあい、助け合いの有償活動。利用者、協力者ともに会員となる必要がある（年会費1,000円）。サービス利用料は700円/時間。
活動実績(2014年度)	登録者 603人 受入機関 267ヶ所	活動時間 年間 1019時間

出所：倉敷市社会福祉協議会 和氣あひあいの倉敷まちづくり（2015年4月）

福祉のまちづくりを推進する目的の住民組織である。株式会社創心會本社のある茶屋町学区は、近年、急速な発展と人口増加をしている地域であり、2015年4月に地区社協が設置されたばかりである。そのため、地域住民の連帯感の希薄さが課題であり、茶屋町地区の「ふれあいサロン」の活動が他地域に比べ極端に少ないことがわかった。「ふれあいサロン」とは、高齢者が歩いて行ける場所で定期的に集い、閉じこもりや寝たきり・認知症の予防を目的に世間話をしたり、健康体操やゲームなどを住民が主体的に企画運営する活動である。倉敷市に申請し活動している「ふれあいサロン」は155団体あるが、茶屋町地区は2団体のみであった。

ハートスイッチでは、①倉敷市のボランティア制度の認知度を高める、②自社の研修等を通じて地域サポーター（ボランティア）の発掘を行う、③ボランティア登録バンクの機能を持ち、地域住民の活躍の場を提供していく、の3つを目的に「地域サポーター養成講座」の取り組みを始めた。

地域サポーター養成講座

第1回の開催概要は以下のとおりである。

開講時期：2015年9月～10月

場所：株式会社創心會 リハケアタウン東館 研修室

受講条件：年齢制限なく、興味のある方は誰でも受講できる

受講料：無料

仕上がり目標：株式会社創心會が行う健康教室の運営補助（介護支援いきいきポイント制度を活用する）

カリキュラム：120分×4回

①オリエンテーション、接遇・コミュニケーションについて

②地域サポーターの役割、ボランティアについて

③健康教室のトレーニングメニューの理解

④教室の運営デモンストレーション

受講者の傾向および講座第1回目を実施したアンケートの結果を図1に示す。

受講者は12名で、平均年齢は67歳である。受講動

機で回答が多かったのは「医療・介護の情報を知りたい」「自分自身の健康維持のため」であり、ボランティアに興味がある人は半数の6名であった。

この講座の修了条件は、4回全てに出席することであり、修了者には「地域サポーター認定証」をお渡しする。今回の修了者は6名だった。修了時の意識調査を図2に示す。

役に立ったカリキュラムで回答数が多かったのは、「③健康教室のトレーニングメニューの理解」であり、受講の動機を反映した結果となった。講座全体を通じての満足度は高く、また、今後ボランティアとしての活躍を希望する人に登録をさせていただいたところ、5名の登録をいただいた。ここまでの講座の運営にあたり、一定の手ごたえを感じている。

● まとめ

住民主体の地域づくりを行うには、地域サポーター（ボランティア）養成機関等が「きっかけづくり」を行う必要があると感じる。私達は、地域サポーターの活躍の場を設定し、継続した活動が行えるよう支援をすべきである。そこから、住民の主体的な活動が広がると期待できる。今回の倉敷市茶屋町のケースでは「きっかけづくり」を始めたばかりである。今後は、地域サポーターの活躍の場を設定するとともに、地域サポーターの養成も定期的に行っていききたい。

● おわりに

このような掲載の機会をくださった編集者の皆さまに感謝申し上げます。また、地域サポーター養成講座

スタートにあたり、トレーニングメニューの開発、アドバイス、講師として等、講座に協力いただいた全ての方々に、この場をかりてお礼を申し上げます。



図1 受講者の傾向および意識調査結果

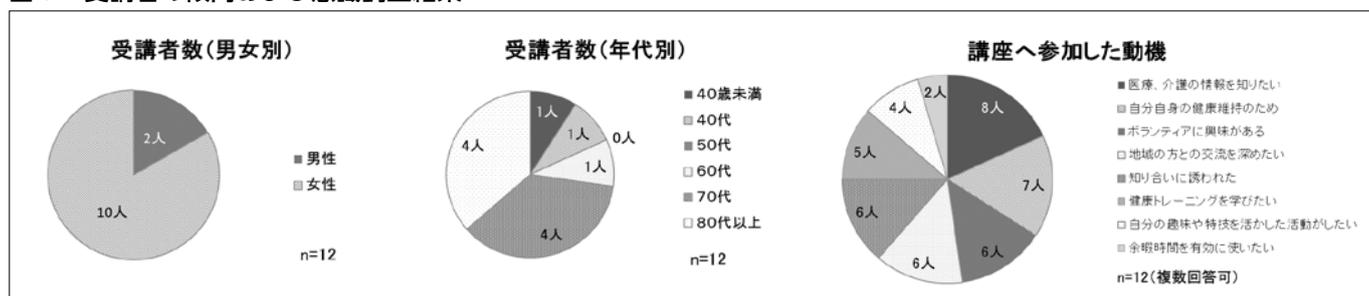
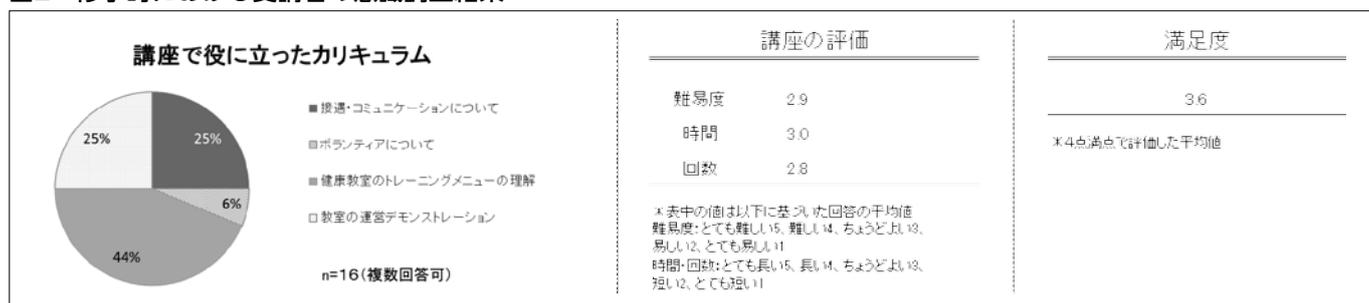


図2 修了時における受講者の意識調査結果



地域連携

農福教民プロジェクト「ハッピーブルースカイ」を通して

児童発達支援ルーム心歩茶屋町 管理者兼児童発達支援管理責任者
作業療法士 西江 勇太

はじめに

平成27年6月～12月の期間での計3回、農福教民プロジェクト「ハッピーブルースカイ」が開催された。この企画は地域包括的ケアが推奨される中、医療・福祉・農業といった様々な機関(株)NKプロジェクト、(株)ブルースカイ、ウェルカムデンタルクリニック、(株)創心會、NPO法人未来想造舎和(一)で協同し、障がいを持ったお子様をはじめ、その家族の支援を食育という形で支援をしていこうと企画されたプロジェクトである。またこのような機会を設けることで今以上に障がい児やそのご家族の方が参加できる環境を拡大・整備していくことを目的としている。今回はその全3回の内容や参加者の様子等の紹介をさせて頂く。

第1回～田植え～

6月に開催された田植えの企画では、ボランティアスタッフも含めて総勢70名程度の方に参加して頂けた。田んぼの中に入った経験のない子達は大半を占めており、田んぼの中と外での歩く感覚の違いや田植えを行う工程の大変さを、身を持って感じる事が出来たようだった。また「身体的にフォローが必要な子だから・多動で落ち着きがないからこの工程は出来ない」ではなく、参加した療法士が中心となり、どのように介助や支援を行えば出来るのかを一緒に考えてアプローチし、田植えに参加することも出来た。

実施後の交流会でも、保護者や関係機関での助言等を始め、保護者様同士での新しい繋がりも生まれたようで、次に繋がる会となった。

第2回～稲刈り～

11月に開催された稲刈りでは、今回もボランティアスタッフを始め、総勢50名程度の参加者のもと企画が進められた。田植えと同様に、子供たちにとって「稲刈り」という工程を見たり、体験したりといった機会は年々減少してきており、新しい経験を積むことが出来たのではないかと考える。当日現場には大量のもみ

殻が大きな山のように積まれており、その上に登ってはしゃぐ子や、その中に埋もれて楽しんだり、鎌を使って手作業で稲刈りを体験したり、コンバインに試乗しての稲刈り体験も行うことができた。稲刈りという工程を体験しながら楽しむことが出来た。また今回も障がいの有無に関係なく、参加者全員が全工程を体験することが出来た。

第3回～収穫したお米を美食～

12月に実施された企画は少人数での開催であったものの、食育アドバイザーによる「食」についての講義や参加者同士での情報交換に加え、当日の会場でもあった歯科医院の見学や、無料検診などの企画などもあり大変盛り上がった。歯科医院の方も、障がい児が受診をされる際に配慮している点や、環境設定等を積極的にされているということも分かり、参加した療法士自身が大変勉強になることも多々あったように感じている。また実際に収穫したお米の試食会も行われ、これまでの工程の振り返りながら、参加者全員で作ったお米の味を堪能することも出来た。

さいごに

参加者の方からは、「障がい児やそのご家族の方が参加出来る機会というのがまだまだ少ない中、安心してこのような活動に参加出来た」「関係機関の方や保護者同士で密に交流を持てるので、色々な情報交換や相談に乗って頂ける」などの感想を頂き、大変満足して頂けたのではないかと感じている。このような企画を実行出来たのも、共催して頂いた関係機関をはじめ、ボランティアスタッフの協力があったからこそであり、今回協力して下さったすべての方々に感謝したい。同時に協同を行っていくことで、地域社会に貢献できるポイントや、バリエーションというものはまだまだ潜在的に眠っているようにも感じた。

現在第4回目も企画中(親子料理教室を検討中)であり、障がい児やそのご家族の方と一緒に様々な経験を積み重ねていくと同時に、もっと出来る可能性を見出

し、気軽に参加できる環境を整えていきたいと考えている。またこのような機会が、障がい児やその家族の方にとって、新しい環境に参加していくための1つの経験値となっていくことを願っている。そして、私たち支援をしていく立場の人間も、参加をすることで初めて見えてくるものや経験を積み重ねることができ、

自分自身の成長にも繋げることが出来たと考えている。

今回の企画で見えてきたものや出来た繋がりを通して、「包括的支援を推進していくこと」「私たちが障がい児やその家族を通じて地域社会にもっと貢献できること」について今以上が考え、今後も継続して支援を実践していきたい。



コラム

『ココトレで快和しよう 第6回 リラックス反応の気づき練習』(10回連載)

本物ケア推進部 佐藤 健志

皆さん、集中力は高いほうですか？

はっきり言って、私は集中力が無いほうだと自覚しています。

特に、一つのことを集中してやるのが苦手でした。すぐに気が散ってしまうので、ちょこちょこ同時平行しているんなことをやります。

事務仕事も、あんまり得意じゃないですね（それでケアマネやってるの？とか言われそうですが）。

どうしてもやらないといけないくらいに追い詰められてから、一気に“ガー——ッ”とやる。

万事がこんな調子ですので、「集中するのが苦手」と自分では思っています。

まあ、私の場合はそんな感じですが。

皆さんも、例えば下のようなことはありませんか？

集中したいのに、廻りの物音が気になって集中できない、とか。

気持ちが落ち着かず、イライラしてしまう、とか。

苦手な人と一緒にいると、何もかももうまうまいかない、とか。

そんな時に、すぐ心身をリラックスして、目の前のことに集中できるようにするトレーニングが、この「リラックス反応の気づき練習」です。

これは、ドイツの精神医学者、シュルツの開発した自律訓練法をベースに、練習方法を簡略化したものです。

自律訓練法とは、平たく言えば自己暗示で、催眠状態を作り出す方法。

この催眠状態に入るだけで、心身の不安が解消され、自然治癒力が高まる、といわれています。

では、その具体的なやり方を説明しましょう。

まずは、環境設定が大切です。

できるだけ静かな、落ち着ける場所で行うことが望ましいとされます。

ベルトや時計、ネクタイなど、身体を締め付けるものは外しましょう。

トイレなどは先に済ませておいた方が良いでしょう。

ゆったりした姿勢で、椅子やソファに腰かけ、(もしくは仰向けに両手足をやや開いた状態で寝る) リラックスした姿勢を保ちます。

この時、両足はしっかり床に接地しておくことが大切です。

次に、「気持ちが落ち着いている」という自己暗示から始めます。

そして、身体がリラックスしていることを確かめます。はじめに手足の重さを自覚し、お腹の暖かさ、額の涼しさを感じて、リラックス反応を確かめます。

これは、いわゆる「頭寒足熱」の状態ですね。

布団に入っているとか、お風呂に入っているとか、そういうリラックスした状態にある、と自分で想像するのです。

リラックスして、この状態を感じられるようになったら。

心の中で、「気持ちが落ち着いている」と、思います。実際に、声に出しても良いでしょう。

次に、実力を発揮したい場面を想像します。

そして、うまく行っている様子を思い描きます。

すると、実際にそのような場面に遭遇しても、慌てることなく「集中+リラックス」した状態で、本来の実力を発揮できるようになるのです。

このプロセスを自分でコントロールできるようになれば、集中しリラックスした状態を、自由に作り出すこともできるようになります。

そして、集中力が高まるということは、あらゆる面で

実力を発揮し、成果を高める結果に繋がるでしょう。

例えば、手のひらに「人」を書いて飲み込む、というのもこの自己暗示のひとつ。

ただ、その効力を自分で感じながら実施しないと、あまり効果が無い、ということなんですよね。

……いかがでしょう。

「リラックスしている状態」というのは、ふだんの生活ではあまり意識していないと思うのです。

ただボーッとする、とか。

そのまんま寝ちゃう、とか。

だけど、意識的にリラックスした状態を「感じる」ように意識することで、このような集中力が高まる効果が期待できる、としたらどうです？

やらない手はありませんよね。

いつでも、どこでも、すぐできる。

そして効果の高い、自己暗示。

それが「リラックス反応の気づき練習」という訳です。

さて、次回は。

ネガティブな方必見、「思い方の練習」です。

感動体験「心のバトン」



「1年目から2年目にあたり」

リハビリ倶楽部笠岡 青野 克也

株式会社創心會に入社し約1年半が経ちました。学生時代は障害者スポーツを福祉の視点ではなく、スポーツの視点での勉強をしていました。そんな私が福祉に興味をもったのは、大学内で創心會の企業説明会に参加させていただいたのがきっかけでした。数多くの諸先輩方が創心會に入社されていることもあり、一から学んで、自分自身のできる事を最大限に発揮できるようにしたいという気持ちが生まれ、「福祉」について深く考えるようになりました。



入社1年目は、1ヶ月の新人研修から始まりました。50名の同期とともに社会人、創心會人としての接遇や福祉や介護について学びました。その中で、二神社長が研修中に教えてくださった「3年間は、自分の価値観は家に置いて、創心會の価値観に染まれ。チャンスは皆平等ではない。」という言葉が常に頭に残っており、現在も継続しております。

そして、新人研修を終え、配属先での業務が始まりました。最初は緊張もあり、覚える事がたくさんあり、失敗を繰り返すこともたくさんありましたが、笠岡センターのスタッフの皆さんが丁寧にご指導してくださり、一つ一つ着実に業務を覚えていくことができました。業務を覚えていく中で、周りの先輩の背中を見ているとそれぞれに強みがあることに気づきました。ご利用者様のことを誰よりも理解しようと心に寄り添う方やフロアを円滑に運営ができるように指示を出す方、ご利用者様やスタッフのことを考えて動いている方など、それぞれの強みを知ることができました。その時に自分自身の強みが何か考えました。強みではないが、1年目は何事にも挑戦するということを決意しました。

できる事を自分自身で確認し、できる事を丁寧に実施し、新たなことに積極的に挑戦し、チャンスをものにしていけるように取り組もうと意識しました。そして、スタッフの入れ替わりもあり、自分自身のキャパシティの拡大と柔軟に対応できるある対応力が必要だと感じ、自分自身に負荷をかけてきました。その中でも、笠岡センターのスタッフの皆さんが気配りやご指導をしてくださったからこそ、現在の自分があると感じています。

現在は、ご利用者様のパーソナル情報を引き出し、ご利用者様のニーズにお応えできるよう、一人ひとりのご利用者様に関わらせていただいております。ご利用者様がなぜ創心會をご利用になったのかを考え、生きがいや役割を持っていただけるよう支援させていただいております。在宅での生活となると、ご家族様の介護負担も大きくなります。介護負担の軽減も図れるようご自宅と通所での様子を送迎時に共有し合い、ご利用者様が在宅での生活を継続していただけるよう包括的に対応をさせていただいております。

これからは、笠岡センターの強みである「未来想造舎和一久」、「合同会社 ど根性ファーム」との連携を図り、多くのご利用者様に社会参加、ご家族様からの自立を促すことができるように、集団訓練や個別訓練の中で生活行為動作の向上を図り、自信を持っていただけるよう努めていきます。そして、オンリーワンのサービスを提供できるよう笠岡センター全体で取り組んでいきます。

最後になりますが、今回このような機会をいただくことができ、感謝申し上げます。次の心のバトンは五感リハビリ倶楽部の上田さんにお渡しさせていただきます。



元気スタッフとして

元気デザイン倶楽部 明比 佑真

私が入社して、はや2年が経とうとしています。2年目となりご利用者様との関係性も徐々に築けてきているのではないかと感じています。私が配属先に出勤したての



頃を思い出すと、私の配属先はご利用者様の人数が多く、なかなか覚えられませんでした。しかし、私が事業所で担える仕事が増えてくる中で、ご利用者様から「歩くときに躓きやすい」や「段差や壁に気づかず怪我をしてしまう」等の声を聞かせてくださるようになり、信頼関係の構築と共に名前を覚えていけるようになりました。今、私はご利用者様の訓練やアプローチに携わらせて頂く中で、ご利用者様にとってリハビリとはとても大変なことであり、いかにリハビリを楽しく笑顔で出来るかを考えながら提供しております。それは私達も同じ事で、どんなに大変な事をしていてもそれが楽しい事ややりたい事（部活や旅行）であれば続けられますが、大変な事にお金を支払ってまで、いつまでも続けようとは誰も思わないと思います。私が今、意識をしていることとして、楽しくリハビリをする為には、他者とのコミュニケーションを取れるように集団で訓練を行っています。そうすることで、一緒にリハビリをしている方と励まし合いながら行える事や、同じ疾患を持った方同士でのピアグループの形成にも繋がります。その点で、元気デザイン倶楽部では「1スタッフ：多数のご利用者様」でフロアを活性化させることが出来ます。そうすることで、たくさんのご利用者様を巻き込みながら、フロア全体でリハビリの雰囲気を作る事が出来ます。また、これを繰り返すことをご利用者様同士でのピアグループ形成から、スタッフの介入がなくともご利用者様自身が自主的にリハビリに取り組み、内発的な運動習慣の獲得に繋がっております。

私は今年入社2年目にして、初めての旅リハにボランティアスタッフとして参加させていただきました。今回は、愛媛県今治市の今治タオル美術館ということで、私の地元でもあることからたくさんの方に参加して頂きたいという思いもあり、積極的にご利用者様に声を掛けさせていただきました。今回私の配属されている事業所から6名の方が参加して下さるという事で、デイサービスで行っているリハビリを、実際外出

先で活かすことが出来ているかを見させていただく機会がありました。今回の旅リハでは、バスでの乗車時間が片道4時間という事で、ずっと座っていることでの腰痛や血行不良による浮腫み等気になりましたが、ご利用者様自身で身体の事を気に掛け、休憩ごとにバスから降り身体を動かしたり伸びをされたりして、腰痛や浮腫み等防ぐことが出来ました。また長い乗車の為、先のことを考え、「もしかしたらお手洗いにいきたくなくなってしまいかもしれない」とお手洗いに適度にいかれる方もおられました。これも、デイサービスでスタッフがお伝えしていることを思い出し、行動されたとの事でした。その他にも様々なリハビリ成果を発見することが出来ました。

バスに乗る為には、段差を乗り越え狭い通路を歩き、座席に座らなくてはなりません。片麻痺で半側空間無視のある女性のご利用者様が、バスへの乗車はスムーズに行えましたが、座席に座る際、座席間を横歩きするのに少し苦戦しました。患側に重心を移動させながら足を上げることが、狭い空間で難しい事が分かりました。そして、昼食の時に席が2階だったことから、30メートル程の連続した階段にエレベーターを使わずに挑戦されました。そこでは手すりを使用して1段1段段差を確認しながらしっかり下肢を上げて昇っていました。少し時間はかかりましたが、休憩することなく階段を上り切ることができ、すると周りのご利用者様から「おー登れたなー」という声があがり、本人様も「登れたよ！ちゃんと見てくれた？」と喜ばれていました。訪問リハビリで階段を上る訓練や、デイサービスでステップ台昇降、ビジョントレーニングをしていたからとリハビリの成果を活かす事が出来ていました。

軽度な認知症を持った男性の方で、デイサービスでメモリーノートを活用し、デイサービスのスケジュール管理を行っており、今回の旅リハではメモリーノートを使用される事は難しいのかなと思っておりました。しかしこの旅リハで、メモリーノートに1つ1つ行ったことを記載されておりました。スケジュール管理も出来ておられ、計画通りに行動されていたことにとっても感動いたしました。「メモリーノートに記載されているんですね。」と聞くと「デイサービスでやり始めて使うようになった」と話されており、デイサービスで行っていることがこのようにしてしっかりと外出先で活かす事が出来ている姿を確認出来ました。

このようにデイサービスにて目標を定めて訓練に励まれ、成果を存分に活かす事が出来たことで、ご利用者様の自信の獲得に繋がったと思います。参加された6名の方にデイサービス利用時に「旅リハはいかがで

したか？」と聞くと「楽しかったー。ありがとね。」と
 言ってくださりました。階段を昇れた女性のご利用者
 様は「前回の旅リハでは車いすを使ったけど今回の旅
 リハでは車いすを使わなかったよ。長い階段も昇れた
 し、美術館も1階～最上階まで全部歩いて見れたよ。
 自信がついた。」と言ってくださりました。そして、メ
 モリーノートを使用していた男性の利用者様からは、
 感謝の気持ちを書いた手紙を頂き、会社に入社して一
 番の感動を味わいました。私も初めての旅リハで、こ
 のような体験をさせていただき感謝しております。ま
 た、来年の旅リハでもたくさんの方に参加して頂き、
 不安という1つの壁へ挑戦していただきたいと思い
 ます。そして、ご自分の出来るをもっと知り自信を持
 ち行動範囲を広げていただきたいです。そこで新しい
 課題を見つけ、リハビリの意欲も増してくるのでは
 ないかと思えます。デイサービスを利用される方の中
 には外出機会も少なく、目標も定まっていない方もお
 られます。デイサービスに来るだけでも、外出そして他
 者交流を図られるというメリットはありますが、目標

をしっかり定め集団体操やビジョントレーニング等の
 1つ1つの訓練も、目標に向けて励むことで小さなこ
 とでも達成感を感じ、そこから新しい目標を発見する
 ことが出来るのではないかと思います。今回の経験を
 通し、私たちの提供させて頂いているサービスの成
 果を自分の目で確認することができたことはとても勉
 強になりました。今後は元気デザイン倶楽部の一員と
 してもっとご利用者様の人生に活動・参加を添えられ
 るスタッフになっていきたいです。



ご利用者様の作品アルバム

album





■ハートスイッチ岡山校



岡山マラソンボランティアに参加して

11月6日に、就労移行支援事業所のご利用者様と一緒にマラソン参加者への配布物の封入ボランティアに参加しました。封入作業のボランティアに参加されていた方は一般の方も含めて全体で120人いらっしゃいました。大人数の中での作業ということに加えて、作業時間は午前10時から夕方まであり、ご利用者様にとっては実際の仕事を想定した作業の練習として良い機会になりました。このような形で地元岡山のイベントにご利用者様と参加することが出来、私自身にとってもいい機会となりました。



■Chaya Cafe



Chaya Cafe (チャヤカフェ) ホームページOPEN!

平成27年6月1日に創心會リハケアタウン東館1階にオープンした「Chaya Cafe (チャヤカフェ)」のホームページが完成しました。

チャヤカフェは創心會リハビリケアセンター内にあるご利用者様の就労支援を目的としたパン屋です。模擬就労としてパンの製造やお客様とのやりとりを実際に行うことで、ご利用者様の就労復帰を支援しています。

■和久



ねぎの自動皮むき洗浄機「ねぎピカ」導入しました!

7月から開始したカットねぎの作業も少しずつ軌道に乗ってきています。

今まではかなりの時間をかけて利用者様一人一人がエアコンプレッサーでねぎの外葉を取る作業をしていたのですが、今後の更なる販路の拡大を目指して、11月にねぎの自動皮剥き機「ねぎピカ」を導入させて頂きました。それに伴い一日の作業量を大幅に増やすことが可能になったため、今後この機械をしっかり活用して作業の効率化を図りながら利用者様に一元でも多くの工賃を支払っていただけるよう取り組んでいきます。



編集後記

2009年春。本物ケアジャーナル創刊号が誕生した。「プロとして共に学び合う機会を創造し、互いの知識や技能を高め合う風土創りに活用して欲しい」との代表の想いが強く込められている。創刊号完成から今回で26号目を迎える。私たちの環境も大きく変化し、地域への広がりも実感している。今回「ハッピーブルースカイ」プロジェクトに参加された方の「障がい児やその家族が参加できる機会は少ない」との言葉に胸が熱くなった。今年大きく踏み出した一歩は、これから私たちが目指すべき目標に繋がっていく。来年も更なる前進を目標に、スタッフ全員で心を合わせていきたい。(赤澤)

書名 株式会社創心會®機関誌『2015年冬号』Vol.26
The Journal of True Care
発行者 株式会社 創心會®
〒710-1101 岡山県倉敷市茶屋町2102番地14
創刊日 2009年5月1日
発行日 2015年12月28日
定価 500円(税込)

※無断転載は固くお断りいたします。

The Journal of
True Care

2015年冬号

第26号
平成27年12月28日発行(年4回発行)
編集・発行/株式会社 創心會 〒710-1101 岡山県倉敷市茶屋町2102番地14 TEL:086-420-1500 E-mail: info@soushinkai.com

創心會
から

株式会社 創心會®